

D—7 児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について（第8報）

（1）乳児期の栄養法と知能との関係

宮崎大教育 ○秋山 露子

1. 1960年筆者等は施設と一般家庭乳幼児についての調査研究から、人工栄養児が母乳栄養児、混合栄養児に比べてやや知能の発達がおくれ、特に施設においては著しい事を認めたので、その後、年齢層別に、乳児期の栄養法が児童の心身発達、特に知能との関係とどの様な関係があるか、又それに影響すると思われる環境条件についても逐年的に検討を重ねて来た。今回は乳児期の栄養法と知能との関係についてこれまでの調査結果に基づいて総合的にその関係を明らかにする事を目的とした。

2. 本研究の対象児は、年齢層別に3歳児91名幼稚園児211名、小学生452名、10歳児2324名、中学生534名計3612名について質問紙により乳児期の栄養法及びその他の環境条件について調査し、乳児期の栄養法を生後6ヵ月以内の栄養法別に分類して乳児期の栄養と知能との関係についてそれぞれの年齢に応じた知能検査による知能偏差値を用い、統計的に比較検討した。母集団の分散の均一性はF検定を用い母平均の差はT検定を用いて検定した。

3. 総合的判定結果では平均知能偏差値は三栄養法中断然混合栄養群の知能が優れていた。又知能偏差値極上位でも混合栄養群が多く、3歳児を除いて人工栄養群が最も少なかった。又小学生以上の年齢では人工栄養群は知能下位が最も多いが幼稚園、3歳児では最も少なかった。この傾向は乳児期の栄養法が知能発達と無関係ではない事を物語っているように思われる。